

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「標準をおおらかにしよう」

前号に続いて、発達「障害」でなくなる日」朝日新書より、お子さんが自閉スペクトラム症（ASD）で、ご自身も「グレーゾーン」という岡嶋裕史教授（中央大学国際情報学部）のインタビュー内容を紹介します。

1 発達障害のお子さんをコンピューターに例えると？

発達障害、特に自閉スペクトラム症（ASD）のお子さんは、入出力装置にちょっと不具合がある。入ってくる情報がゆがむ、出ていく情報がゆがむ。例えば、怒られた、という入力に対して、普通は謝る、という出力があるのに、発達障害のある子だと「どこかへ行く」とか「何も感じない」という出力になってしまう。ディスプレイやキーボードに不具合があるパソコンってなかなか使いづらい。そこを、アプリオリ（生得的）に理解することはできなくても、「正しい」出力を返せるようにするための練習が必要となる。



2 ご自身も発達障害の特性があるが、今や大学教授、どうやって乗り越えてきたのか？

人の表情や気持ちを読み取ることが苦手で、意味ありげな目配せの意味が分からないなど、暮らしにくさを感じていた。「普段と違う」ことが苦手だったので、運動会とか遠足とか、イベントは大嫌い。帰属意識が希薄なので、すぐ休むし、周りから見たら完全に社会不適応な子どもだったと思う。嫌だなと思いつつ場数を踏んだりするうちに、経験値が貯まって「よく分からないけど、ここはこういう振る舞いをしとけばいいんだ」と分かってきた。一方で、特性がより色濃くて、すぐに明確な診断がつく人は、いくら経験を積んでも、自力で健常者と同じ水準に達することは難しい。だから障害であって、誰かの助けが必要なんだと思う。

3 「うちの子、大丈夫かな」と思ったとき、親や周囲はどのように環境を整えたらよいか？

本人が情熱を燃やせるもの、どんなささいなことでもいいので自信をもてるものと出会うきっかけをつくってあげることは大事である。嫌がられると思うけど、どんどん関わった方がいい。特に自閉傾向の子は、自分から世界を広げていくのが苦手だから。

4 社会に求めたいことは？

当事者として、保護者としては、変なことをしていてもちょっと見逃してくれるといいなと思う。「手を差し伸べてほしい」だとハードルが高くなってしまいうし、こちらもそこまで期待していないけれど、変なことを障害の特性でとめられないので、ちょっと目をつぶってくれると、それだけで気持ちが楽になる。そういう雰囲気が社会の中で浸透していくと、みんなにとって居場所のある世界になっていくのかなと思う。

日本の社会は、「標準」といわれる枠から外れることを許さない、厳しい社会です。学校のように大勢集まる場では、少数派といわれる子どもの特性は理解されないため、さらに困り感が大きくなります。「全員発表、残菜ゼロ」のような目標や「全員一律」という指導を見直し、「標準」をおおらかなものにしてほしいと思います。

**とれたて直送便****「一つならいいよ！」**

手にミニカー等を持つことで安心して活動できる子どもがいます。しかし、周りからは「どうして〇〇さんだけミニカーを持っているの」と不満の声が聞かれます。そこで、先生は「一つだけ」と条件を付けて許可したところ、本人も周りの子どもたちも納得しました。

子どものやりたいを叶えるために、「標準」をおおらかにする大切さを実感しました。